

# や ま な い 雨

八  
神  
大  
輔

第一話「Busling time」

1

「あ……」  
「……っ」  
「……あら」  
夕暮れ時、桜峰の駅の近くで、彼女たちは出会った。  
それぞれはすでに以前から面識はあったが、こうして三人  
が一堂に会するのは、実はこれが初めてだった。  
「お久しぶりです、真冬さん」  
そう云って、銀の髪を揺らし、金の瞳を細めながら微笑ん  
だのは、双海詩音だ。  
対照的に、闇のように黒い髪と瞳の藤村真冬は、いつもど  
おり、唇の端だけでニツと笑ってみせた。  
「久しぶり。一人でお出かけ？」  
云いながら、軽く首を傾げて、真冬は詩音の連れに目を向  
けた。  
真冬と姉妹だと云っても通用するぐらい、雰囲気がよく似  
ている少女。流れるような黒髪をポニーテールにした寿々奈  
鷹乃は、なぜか気まづげに視線をさまよわせていた。  
「あ、はい、その……」  
「……？」  
「朝風荘で、信さんのお祝いをするんだそうです」  
鷹乃の様子を見て、真冬は訝しげに眉をひそめたが、詩音  
は気づかないようだった。  
真冬がじっと見つめると、さらに鷹乃は身を固くしてしま  
う。やむなく、真冬は視線を詩音に転じた。  
「信のお祝い？」

「はい。バイト先の『ルサク』で、正社員登用のお話が出てい  
るそうなんです」  
「……ふうん」  
特に驚いた様子もなく、むしろ不審そうに真冬は相づち  
を打った。一方、詩音は嬉しげに微笑んでいる。  
「それも、店長候補として考えてくれるそうなんですよ。す  
ごいですよね」  
「それはまた、無謀な話ね」  
「……私も、ちょっとだけそう思いますけど……」  
真冬が肩をすくめると、詩音も小さく苦笑した。  
「それで、お祝いをしようって、三上くんと唯笑さんが」  
「なるほど。それで、鷹乃も呼ばれたんだ？」  
「は……はい、私はいって云ったんですけど、健がどうして  
もって……」  
「……鷹乃？」  
相変わらず、鷹乃の様子はおかしい。身の置き所もないほ  
ど狼狽しているように見える。  
真冬はしばし目を細めたが、すぐ何かに気づいて苦笑する  
と、鷹乃の頭を軽くぼんと叩いた。  
「バカね。変な気の使い方しないの」  
「真冬先輩……」  
「私と双海さんが恋敵だってことと、あんたが双海さんと仲  
がいいのは、全然別の問題でしょう？」  
「あ……」  
その言葉に、詩音もようやく現在がどういう状況か気づい  
た。  
当事人は 少なくとも詩音はそのつもりで 屈託  
なくつきあってきたとしても、鷹乃の立場では、途方に暮れる

しかないだろう。

敬愛する先輩と、数少ない親友と。それぞれの恋をただ応援することができれば、どんなに。

「ほんっと、そういうとこ、変わらななんだから」

叱られた子供のようにうなだれている鷹乃に、真冬は優しい微笑を向けた。そして、微笑んだまま詩音を振り向いた。「この通り、堅物なんだけど、これからもよろしくしてあげてね」

「ま、真冬先輩……」

「いえ、こちらこそ、よろしくお願いたします」

さすがに鷹乃が赤くなつて真冬を止めようとしたが、詩音は大真面目に頭を下げた。

詩音らしいその態度に、真冬と鷹乃が目を見交わして小さく笑う。それでやっと、鷹乃の緊張もほぐれたようだった。

安心したようにもう一度微笑むと、真冬は軽く手を振って歩き出そうとした。

「それじゃ。店に迷惑かけないよう、よく考えろって、信に云つておいて」

「あ……真冬さん」

「なあに？」

詩音に呼びかけられ、真冬が足を止めて振り返る。

詩音は微笑んで、けれど瞳に少し真剣な色を潜めて、提案した。

「お時間があれば、ご一緒にませんか？」

「……え？」

「ちよっと、詩音？」

真冬が不審そうにずっと目を細めた。鷹乃も驚いて詩音の顔を覗き込む。

詩音は動じることなく、まっすぐ真冬を見つめていた。

しばしの沈黙のあと、真冬はため息とともに言葉を吐き出した。

「遠慮しておくわ。私が行っても、場が白けるだけでしょ」

「そんなことはありません。信さんのお祝いですから。真冬さんが来てくだされば、信さんも喜ぶと思います」

「……どうかしら」

云いながら、真冬は背を向けてしまった。しかし、その背中にある答えは、「拒絶」ではなく、「迷い」であるように、詩音には思えた。

「三上くんたちも、いらっしやいますよ」

「……だから、行かないって云ってるんじゃない。意外と意地悪なのね、双海さん」

「私は、むしろ、だからこそ、真冬さんに来てほしいんです」

唇を噛む真冬。詩音と鷹乃にじっと見つめられたまま、少し考えたあと、真冬はため息混じりに頷いた。

「……わかったわ」

三人が朝風荘の信の部屋に到着したとき、すでに他の参加者は揃っていた。

奥には家主であり、今日の主役である稲穂信。右側には三上智也と今坂唯笑が、左側には伊波健が座っている。

ノックの音がして、詩音たちが姿を現すと、まず唯笑が満面の笑顔で立ち上がった。

「あー、やっと来たあ。遅いよ、詩音ちゃん、鷹乃ちゃん。……って、え？」

詩音、鷹乃に続いて部屋に入ってきた真冬。その姿に、唯笑が目を丸くして言葉を失う。振り向いた智也と健も、驚いて少し目を開いた。

「……真冬さん？」

真冬は硬い表情で、唯笑から目をそらした。所在なげに、玄関口で立ち尽くす。

そんな真冬の背に、促すようにそっと詩音が手を回した。

「途中でお会いしたので、私がお誘いしました」

「あ、そ、そうなんだ」

「……」

真冬はやはり何も云わず、ただ顔を上げて信の方を見た。信もやや意外そうな顔をしていたが、真冬と目が合うと、いつものように顔中を笑顔にして見せた。

「真冬も来てくれたのか。サンキユ」

その笑顔に、ようやく真冬が小さく微笑む。真冬だけでなく、その場にいる全員がほっと息をついたように思えた。

「突っ立ってないで、三人とも早く座れよ」

「智也、ここはお前んちじゃないぞ」

「細かいことにすんなって」

信と智也のやり取りに苦笑しながら、詩音たちは部屋に

上がった。

智也が席を空けて、詩音が信の隣に腰を下ろす。鷹乃は健の隣に。そして、真冬はその鷹乃の隣、信の真向かいに座るような形になった。

「じゃあ、信くんの嘘みたいな出世を祝して、乾杯しまーす」

「……唯笑ちゃん……」

身も蓋もない唯笑の祝辞に、信が悲しそうに眉をひそめる。

それぞれが飲み物の入れられたグラスを掲げようとしたとき、真冬の硬い声がそれを遮った。

「待って。その前に……」

「ほえ？」

「ん？」

全員の訝しげな視線を受けて、真冬は智也と唯笑に向き直った。そして唇を噛んで、そのまま深々と頭を下げた。

「え、ちよ、ちよと……」

「真冬さん？」

「あのときは、ごめんなさい、本当に」

「……」

「……」

智也と唯笑が顔を見合わせる。健と鷹乃は困惑し、信と詩音は悲しげに表情を曇らせた。

あの初冬の事件から、すでに一年以上経っている。その間にも色々な出来事があったけれど、真冬が智也や唯笑と顔を合わせる機会はなかった。

だから、詩音は今日、真冬をここへ連れてきたのだ。智也と唯笑が、真冬のことを誤解したままでは嫌だったから。

しかし、それは詩音の杞憂だったようだ。いや、むしろ予想どおりというべきか。

唯笑はその名のとおり、ただ笑顔で首を振ったのだ。

「真冬さんが謝るようなことじゃないよ。ね、智ちゃん」

「そうだな」

微笑んで、智也も頷いた。

二人の笑顔に、真冬もはにかんだような笑みを返した。そうすると、少女のようなあどけなさや浮かんできて、唯笑はまぶしそうに目を細めた。

「ありがとう、今坂さん、三上くん」

「もう、だから、お礼云われるようなことでもないってばあ。

さ、乾杯しよ、乾杯！ あ、唯笑のことは唯笑って呼んでね」

「……うん、わかった、唯笑ちゃん」

「えへえ。はい、じゃあ、かんぱーい！」

今度こそ全員がグラスを掲げて、乾杯する。グラス同士がぶつかる硬い音が、騒がしく響いた。

「いやー、みんな、ほんっと、ありがとうな。俺のためにわざわざ集まってくれて」

「気にするな。ただ集まって騒ぐ口実がほしかっただけだ」

「智也！ お前なあ……」

「そうそう、受験まったただ中だからねえ。たまには息抜きしなきゃ」

「唯笑ちゃんまで……」

「ほんと、この忙しいときに、迷惑だわ」

「ちよ、ちよっと、鷹乃」

「……」

言いたい放題の友人たちに、信はかなり本気で落ち込んでみせる。彼をいちばん傷つけたのは、詩音まで一緒に笑っていただけだったかも知れないが。

そんな様子を、真冬は頬杖をついて、微笑んだまま見つめていた。

鷹乃という例外を除いて、真冬には高校時代、特に親しかった友人はほとんどいない。当然、こんな風にバカ話で盛り上がったこともない。

そのことを後悔しているわけでも、羨ましく思っているわけでもなかったが、真冬の知らなかった今のこの空気は、確かに

心地よいものだった。

しかし、信が次に口にした話題に、真冬の目はずっと細められることになった。

「まあ、確かにこうやって集まってもらうのは、心苦しくはあるな。みんな忙しいときだし」

「おいおい、冗談だって」

「ああ、わかっている。それだけじゃなくて……その……まだ、決まったわけじゃないんだ」

「……え？」

「ほえ？」

「信くん、それってどういうこと？」

全員に詰め寄られて、信はばつが悪そうに頭をかいた。ただ詩音だけは事情をわかまえていて、ただ静かに信の横顔を見つめていた。

「正社員に、って話があったのは本当だよ。ゆくゆくは店長候補……なんて、嘘みたいなことも、ほんとに云われた」

「だったら、何の問題があるってんだ？」

「その……まだ、返事してないんだ」

「……はあ!？」

「ええっ、なんでえ!？」

不審の声はさらに高くなる。信は困ったように苦笑するばかりだ。

「うん……まあ、ありがたい話ではあるんだけど……それでいいのかなってな」

「いいも悪いもないだろう！ せつかくのチャンスじゃないか」

「そうだよー！ 詩音ちゃんも、その方が安心するよ。ね、詩音ちゃん」

不意に唯笑から話を振られて、詩音は驚いて顔を上げた。そして、少し首を傾げて自分を見つめる信に、微笑んで見せた。

「そう……ですね。私も、いいお話だとは、思いますけど」

「うん……やっぱ、そうだよな」

顔きながらも、信は詩音から目をそらした。その先には、黙ったままじつと信を見つめていた真冬がいた。

信は何も云わなかった。けれど、真冬は信と目が合うと、静かな声で呟いた。

「いいんじゃないの。それがほんとにあんたのやりたいことなら」

「……そう……なんだよな」

真冬の言葉を噛み締めるように、信は深く頷いた。

その態度に、詩音は誰にも気づかれぬよう、そっと胸を押さえた。なぜだか、ひどく居心地の悪い想いがした。

3

宴会の主題はやや曖昧になってしまったが、それでもそのあと、場は盛り上がり、誰もが楽しい時間を過ごした。残念ながら、その時間はあまり長いものではなかったが。

今は一月の末。信と真冬を除いて、全員が受験を目前に控えているのだ。

「じゃな、信。あんまりうだうだ考えるなよ。似合わないんだから」

「うるせーよ」

朝凧荘の玄関口で、智也は軽口を叩きながら手を振った。唯笑も笑顔でそのあとに続く。

「あはは、じゃあねー、おやすみー」

二人並んで帰っていくその姿を見送りながら、真冬は鷹乃に声をかけた。

「じゃ、私たちも帰りましょうか。送っていくわ、鷹乃」

「え……本当ですか？」

嬉しげに頬を染める鷹乃。反対に、少し残念そうな健に、真冬は軽く微笑んで見せた。真冬には珍しい、からかうような、いたずらっぽい笑顔。

「それとも、お邪魔かな？」

「あ、いえ……」

「飛んでもありません！」

思わず健が赤くなつて首を振るが、それより早く、鷹乃が力強い調子で否定する。今度こそがつくりと肩を落とす健に苦笑しつつ、真冬は信と詩音に軽く手を振った。

「じゃあね。おやすみ、信。双海さんも」

「ああ、気をつけてな」

「あ……はい、あの……」

「ん？」

何かを云いかけた詩音に、真冬は首を傾げて先を促した。

詩音は何度かためらったあと、少し頬を赤くして口を開いた。

「その……私のことも、『詩音』って呼んでくださると、嬉しいのですけれど」

「……」  
真冬の瞳がすっと細くなる。その仕草に、詩音はやはり云うべきではなかったかと、体を固くした。

真冬は親しい女性を名前で呼ぶことが多い。鷹乃はもちろん、静流や小夜美、そしてたった今、唯笑のことも。それが少し羨ましかった。

けれど、やはり自分にはそんなことを望む資格はなかっただろうか。私は彼女の「友人」ではあり得ないのか。

詩音のそんな物思いを裏付けるように、真冬は冷たい声で呟いた。

「私には、恋敵と馴れ合うような趣味はないわ」  
「そう……ですね」

予想通りの答えに、詩音は悲しげにうつむいた。

その様子を見て、真冬はニツと唇の端だけで笑った。猫のよう、と彼女が呼ばれる由縁。

「そういうこと。じゃあね、おやすみ、詩音」  
「あ……」

驚いて詩音が顔を上げたときには、真冬はもう背を向けて歩き始めていた。目を丸くしている詩音に鷹乃が微笑みかけ、真冬のを追う。

ほとんど茫然として、詩音は彼女らの後ろ姿を見送っていた。その肩を、信がそっと抱き寄せた。顔中を笑顔にして。

「あいつは、かっこよすぎるんだよね」  
「……はい」

微笑んで、詩音は頷いた。

このとき、詩音は本当に嬉しかった。たとえどのような経緯があったとしても、真冬に出会えたことを喜びだと思っていた。

そう、思っていたかった。

日曜日の昼下がりに。

詩音は居間で参考書を広げて、キッチンから聞こえてくる料理の音に耳を傾けていた。

料理をしているのは、お手伝いの人ではない。信だ。

普段、勉強にあまり身を入れない詩音だが、受験となるとそうも云ってられない。必然的に、デートできる時間も少なくなる。同じ受験生同士なら、一緒に図書館に行ったりすることもできたのだが。

一方、信もバイト先で任される仕事が多くなって、忙しい毎日を送っている。互いの都合をつけて外で逢うのは、なかなか難しい状況だった。

そこで、信の時間があるときに、彼が詩音の家を訪れることが多くなっていった。あまり長い時間ではないが、紅茶を飲みながら歓談したり、時にはこうして信が料理を作ったりする。

彼の手料理をいつも振る舞われる立場、というのは、さすがの詩音にとっても少し複雑であったけれど。

仕事で毎日厨房に立っている信の腕には、もはや詩音は叶わない。受験が終われば、私も静流さんや小夜美さんに料理を習うべきだろうか。そんなことを考えて、詩音は苦笑した。

「よっ、お待たせー。できたよ」

「あ……はい、ありがとうございます」

両手に皿を持って、信が居間に入ってくる。詩音は急いでテーブルの上を片づけた。今日の昼食は焼きそばだ。

「お口に合えばよろしいのですが」  
おどけてみせる信に微笑んで、詩音は箸を取った。一口食べて、にっこりと笑顔を浮かべる。  
「おいしいです」

「ほんと？ はは、よかった」

満面の笑顔を返しながら、信も自分の箸を取って食事を始めた。

とりとめのない話をしながら、時間は過ぎてゆく。

やがて食べ終わると、詩音は食器をまとめて、キッチンへ下げようとしたり。

「あ、俺がやるよ」

「いえ、これぐらいはやらせていただかないと……私の立場がありません」

「ははは、そんなことはないだろ」

屈託なく信は笑うが、詩音は少し真顔になってため息をついた。相変わらず大袈裟に考える詩音に、信は小さく苦笑する。それに気づいて、詩音も少しはにかんだ笑みを浮かべた。

「でも、本当にすごいです、こんなに素敵なお料理ができるなんて」

「たかが焼きそばで、そんな、大袈裟だよ」

「いえ。手際もいいですし……さすが、プロのお仕事と云うしかありません」

「サンキュ。まあ、毎日やってるからな……」

恋人に手放して褒められて、信は照れながら頭をかいた。そして、ふと真顔になって、呟いた。

「そっだな……やっぱ、このまま料理人にでもなるか……」  
「信さん……？」

その言葉は、深いため息に似ていた。詩音は眉をひそめて信をじっと見つめたが、信は自分の考えに沈み込むように、何も云わなかった。

「何か……ご不満があるのですか？」

ルサクでの正社員登用の話を、信がすぐに受けなかった理由を、詩音は聞いていなかった。バイトの方が気楽だし、という信の軽口を、特に疑いもなく受け入れていたかも知れない。その軽率さに、詩音は自分を責めた。



「いや……不満なんか、あるわけないよ。智也たちにも云われたとおり、ほんと、いい話だと思う」

「だったら……？」

「うん……」  
言い淀む信の手を、詩音はそっと伸ばした掌で包んだ。驚いて信が顔を上げると、真摯な瞳でじっと見つめている詩音と目が合った。

「何か悩み事があるなら、私にもお話ししてください」  
「……サンキュ」

信が笑う。詩音の大好きな、その笑顔で。

しかし、今日に限って、その笑みは詩音を不安にさせた。瞬間、詩音は考えてしまう。キカナケレバヨカッタノカモシナイ。

「ほんと……具体的に何がどう、ってことじゃないんだ。ただ、それが本当に俺のやりたかったことなのか……。学校やめてまで見つけたいと思ったことが、本当にそれなのかなって……さ」

「……」  
詩音の目が見開いた。小さく息を飲むと同時に、先日真冬の言葉が思い出されていた。(いいんじゃないの。それがほんとにあんたのやりたいことなら)

信の手を包んでいた手を離し、詩音は膝の上に置いた。強く拳を握りしめて。そして、自嘲気味の笑みを浮かべた。

「詩音ちゃん……？」

その様子に気づいて、信が眉をひそめて詩音の顔を覗き込んできた。

それに対して、詩音は、小さな声で呟いた。呟いて、しまった。

「あなたの心を動かすのは……いつも、真冬さんなんです」

「……」  
「詩音ちゃん……」

その言葉の意味に、信が絶句する。詩音自身も、はっと我

に返って、自分が何を口にしたかに気づいた。狼狽して視線をさまよわせる二人。

「……」  
「ごめんなさい、私、何を云っているんでしょう」

「……」  
「その……お茶、入れますね。少々、お待ちください」

食器を手に、逃げるようにして詩音はキッチンへ向かった。紅茶を選ぼうと、棚へ伸ばした手が震えている。詩音はその震えを無理矢理押さえつけるように、強く両手を握り合わせた。

何を云ってしまったのだろう、私は。これでは、まるで私は、真冬さんのことを。

わき上がる想いを否定するため、詩音は強く唇を噛んで、目を閉じた。

そして、居間に残された信もまた、苛立ちに唇を噛みしめていた。

何を考えているのだろう、俺は。これじゃあ、まるで俺は、真冬のことを。

つい浮かんでくる考えを振り切るように、激しく頭を振る。

これまで、たとえどのような経緯があったとしても、真冬に出会えたことを喜びだと、信と詩音は思っていた。

そう、思っていたかった。

第二話「Love & paradox」

1

その公園は、想い出の場所だった。  
彼女と彼にとって、大切な。

そこに立つと、切ない痛みが胸を締め付ける。それでも真冬はその場所が好きで、足繁く通っていた。

特に何をするわけでもなく。大切なひとと過ごした短い時間を愛おしむように、ただ静かにベンチに座って、時を過ごした。

そこを再び彼が訪れることは、あの初夏の朝より、一度もなかったのだけれど。そう、ずっと、これまでは。

「……こんなとこで何してんだ？」

声をかけられても、不思議と真冬は驚かなかった。ただ当たり前の日々の続きのように、振り返って、微笑んだ。

「あんたこそ」

予想どおり問い返されて、信は小さく微笑んだ。しかし、次の瞬間には、その表情は悲しみと苛立ちで翳ってしまう。真冬はすっと目を細めて、首を傾げた。

「信？」

「……あ、いや……ただ……なんとなく、な」

「ふうん。私に逢いたかったんじゃないんだ」

「あ……いや……そう、なのかな、やっぱ……」

「なによ。歯切れ悪いわね」

責めるような口調とは裏腹に、真冬は心配そうに信を見つめていた。

しかし、信は真冬と目を合わせることができなかった。

そう、真冬の云うとおり。あのときと同じように、「ここに

来れば逢えるような気がして」「そう答えそうになった。実際、そのとおりだったのだから。けれど。

「……座れば？」

「……ああ……」

真冬の隣に腰を下ろし、信はため息をついた。真冬はその横顔に、強い視線を送っていた。

「どつしたのよ。店のことで、悩んでるの？」

「ああ……それも、あるな」

「……」

「……辞めようかって……思ってる」

「……なんですって？」

思いがけない言葉に、真冬はつい声を荒げた。信は相変わらず真冬とは目を合わさず、うつむいている。

その姿に、真冬は小さく吐息を漏らして、肩をすくめた。

「いったい、なんの冗談なの、それは。そんなことして、どんな意味があるって云うの？」

「そうだけ……このままじゃ、俺は……」

「……」

「もともと、俺が学校をやめて家を出たのは、自分一人で何ができるのか、確かめたかったからなんだ。だけど、俺は……あの頃と、何も変わっちゃいない……。環境が変わっても……流されてるだけだ……。そんなの……」

唇を噛みしめ、拳を振るわせる信。

しかし真冬は、そんな信をいつそ冷ややかと云える表情で見据えていた。そして、一言、吐き捨てた。

「……バカなんじゃないの？」

「……ひでえよ……」

心底情けなさそうに顔を歪めて、ようやく信は真冬を振り仰いだ。真冬はそれでも同情など一切見せず、厳しい表情で言葉を続けた。

「ほんと、あんたは変わらないわよ。行き詰まると、すぐ全部投げ出そうとする。そんなんじゃ、いつまで経っても、同じことの繰り返しよ」

「……」  
思わず息を飲んで、信は真冬の顔をじっと見つめた。強い意志を映してきらめく黒瞳に、消えることのない翳りは、悲しみ。

かつて己の弱さが、そこに残した傷痕。  
そう、承知していたはずなのに。

「……ほんと、バカだな、俺は」

「気づくのが遅すぎるのよ」

乱暴に真冬が目をそらした。本当の気持ち表情に表れることを、恐れたように。

「……詩音には、この話、したの？」

「いや……」

「三上くんには？」

「まだ……お前が、最初だよ」

「そう……喜んでいいのかどうか。私は、あんたに「親友」なんて位置づけられるのは、嫌だからね」

きつい、けど、どこか拗ねたような物言い。その響きに、信の胸は痛んだ。

「……すまん、無神経だったな」

「嘘よ……嬉しかったわ。少しだけね」

そう云って真冬は振り向き、微笑んで見せた。

いつもとは違う、穏やかで悲しげな笑顔。

信は胸が高鳴るのを自覚していた。

親友、と真冬は云った。けれど、自分は本当にそんなつもりで、真冬に会いに来たのだろうか。そう、これではまるで。

「じゃあ、私はもう、行くわよ。午後から授業あるから」

「あ……ああ」

「あんたもバカなこと考えてる暇があったら、とっとと働きなさい」

そう云ってハッパをかけてくれるのは、もういつもの真冬だった。

凜と背筋を伸ばして去るその後ろ姿があまりに魅力的で、信はつい立ち上がって声をかけた。

「なあ、真冬……」

「なあに？」

「お前……好きな奴とか、できないのか？」

「……」

真冬が足を止める。拳を握りしめ、肩を震わせて、力を溜めること十五秒。

振り向くと同時に、右腕を高く掲げた。

「本気でぶん殴るわよ」

「ちよ、ちよっと、タンマ」

慌てて信が後ずさった。真冬はその姿をしばし睨みつけたあと、大きなため息と同時に拳を下ろした。そうして、泣き出しそうな表情で、じっと信を見つめた。

「ま、真冬？」

「……重荷なの？」

「……え？」

「私の存在が、重たくなった？ 本当の悩みは、それ？」

「な……っ、ち、違うよ！ そんなんじゃないって！」

そんな風に考えさせてしまっなんて、信は想像もしていなかった。真剣な表情で言い募る信から、真冬はそっと視線をそらした。

「……じゃあ、いいじゃない。訊かないで、そんなこと」

「真冬……」

「恋は、一度でいいわ」

信に背中を向けて、青い空を見上げて。唇からこぼれたの

は、風にさらわれそうな小さな囁きだった。

それは、つらい想いは二度としたくないという意味だったのか。それとも、今の気持ちをも、ずっと抱いていたいということなのか。信には、その答えはわからなかった。

ただひとつ、真冬にそう云わせたのは、自分自身だということを除いて。

「……淋しいこと、云うなよ」

「……」

「なあ、真冬……」

「謝らないって、約束よね」

「……ああ……」

ため息混じりに頷きながら、信は考えた。謝りたかったのか、俺は？ 本当に？

「……『雨はいつあがる？』」

「……え……」

思いがけないその言葉に、信はほとんど茫然として顔を上げた。

真冬は何事もなかったように、ニツと唇の端だけで笑って見せていた。

「唯笑ちゃんから聞いたわ。あんたにしては、随分気の利いた台詞じゃない」

「……」

「ほんと、いつつも人のことではっきり一所懸命になっちゃってさ。たまには自分の足元をよく見なさいよ」

「……」

「……じゃあね」

今度こそ振り返らず、真冬は公園を出ていった。信も呼び止めず、深いため息と同時に、もう一度ベンチに座り込んだ。

(本当、何をやってるんだ、俺は)

「お客さん、立ち読みは困るんですけど」

「……あ……」

不意に声をかけられ、はっと詩音は手にしていた本から顔を上げた。

実際には、立ち読みをしていたわけではない。ただ本を持ったまま、じっと考えにふけてしまっていた。

声をかけた方も、そのことには気づいていた。軽く肩をすくめながら、彼女は苦笑した。

「どうしたの。詩音が本を前にしてほかのこと考えてるなんて、珍しいじゃない」

「ご、ごめんなさい、鷹乃さん」

「別に、謝ってもらおうようなことじゃないけど」

答えつつ、鷹乃はもう一度肩をすくめた。

詩音は、鷹乃の家の書店を訪れていた。小さいが、専門書の充実しているこの「櫻書店」は、この界限では詩音にとって貴重な存在だった。詩音と鷹乃のつきあ

いも、詩音が頻繁にここへ通ったことから始まったものだ。今ではただ本を探すだけでなく、鷹乃に会うことも楽しみにして、詩音は通っている。だから、詩音がここに来ること

自体は、珍しいことではなかったのだが。

「何か、悩み事でもあるの？」

「……いえ、そんなことは……」

「そんな暗い顔で云ったって、説得力ないわよ」

軽くため息をつくとき、鷹乃は首を振って詩音を奥に促した。

「ちょっと上がって。お茶用意するから」

「あ……でも、お店の方は……」

「見ての通り、今は暇してるから、大丈夫よ。呼ばれればすぐわかるし」

そう云って、鷹乃はさっさとレジの奥から家へ上がってしまった。詩音はためらいながらも、やむを得ずそのあとに続いた。

\*

「それで？」

「……」

ティーカップを片手に、鷹乃は首を傾げて詩音に尋ねた。紅茶を入れたのは、鷹乃だ。詩音の手ほどきを受けて、最近では紅茶を入れるのが楽しくなっている。真冬が珈琲党であることが、鷹乃には残念であったけれど。

詩音は紅茶に口をつけず、ただうつむいてカップを見つめている。

鷹乃は眉をひそめて、紅茶を一口飲んだ。

「……真冬先輩のこと？」

「……」

弾かれたように、詩音が顔を上げた。目を見開いたその姿は、ただ驚いているというより、何かに怯えているように見えて、鷹乃は不審な想いを強めた。

「そんなに驚かなくて。詩音が私に云いにくい悩みについていえば、真冬先輩のことだって、想像つくでしょう」

「そう……そうですね」

うなだれる詩音。痛々しげなその様子は、鷹乃がこれまで見たことのない姿だった。

「何があったの？ この間は、とても険悪な風には見えなかったけど」

「はい……特に何かがあったわけではありません……私は、真冬さんのことがとても好きです……憧れています……」

自分自身に言い聞かせているような口ぶりに、鷹乃は違和感を覚えた。しかし、何も云わず、話の続きを待った。

「……いいえ、だからこそ……」

「……？」

「彼には……信さんには、真冬さんの方が……ふさわしいんじゃないかって……」

今度ははつきりと、鷹乃は眉をひそめた。そんな卑屈な考え方は鷹乃の嫌うところだったし、何より詩音らしくない。

だが、そんなことは、詩音自身が誰よりよくわかっていたはずだ。それでも、その口にせざるを得なかったことに、そして、自分自身が口にしたその言葉に怯えているような詩音の姿に、鷹乃の胸は痛んだ。

「やっぱり、何かあったんでしょう？」

「……」

うつむいたまま、詩音は答えない。

鷹乃はため息と同時に、わざと乱暴な口調で云った。

「どちらかというと、私には、詩音も真冬先輩も、あの男にはもったいないと思えるけどね」

「そんな……」

思わずカッとなって、詩音が顔を上げた。鷹乃はその視線を冷ややかに受け止めて、そして、不意に優しく微笑んだ。

「……鷹乃さん……？」

「それだけ好きなんですよ、彼のことが」

「……」

詩音の頬が見る見る赤くなる。鷹乃は微笑んだまま、紅茶をもう一口飲んだ。

「だったら、ふさわしいかどうかなんて、関係ないじゃない。ふさわしくなければ、どうするって云うの？ 黙って身を引くの？」

「……」

やはり詩音は答えない。いや、答えられなかった。

自分が口にしたことのずるさに、気づいてしまったから。

そう、ふさわしいかどうかなんて、問題ではない。大切なのは、それぞれの気持ち。詩音と、真冬と、 信の気持ち。

だからこそ、こんなにも不安になる。

再び蒼白になってうなだれる詩音に、鷹乃はほとんど途方に暮れてしまった。我知らず、ため息が多くなってしまふ。

「……私は、白河さんと、五年後にどっちがいい女になっているか、勝負しようって約束したわ」

「……」

「でも、それはどっちが健にふさわしいとか、そんな話じゃない。ただ自分自身と、そして、大切なひとに誇れる自分であるように……って、そう願って」

「それは真冬先輩だって同じだし……詩音もきつとそうだって……信じてるから」

鷹乃の精一杯の言葉も、今は詩音の心に届かなかった。

それ以上何もできず、ただ見守るしか術のないことに苛立つて、鷹乃は唇を噛む。

そして、詩音は、ただひたすら自分を責め続けた。そうしないと、この痛みを誰かの 大切なひとのせいにしてしまいそうで。それが、とても怖かった。

3

浜咲駅のホームのベンチで、信は足を投げ出して座っていた。

結局、今日はバイトをさぼってしまった。真冬と別れたあと、宛もなくぶらぶらとさまよい、そして今は、意味もなくこんなところでぼーっとしている。

「……」

今日一日で数え切れないほど繰り返したその問いかけに、やはり未だ答えられるものを見つけれず、信は深いため息をついた。そのとき。

「……信さん？」

「え？」

顔を上げた信の瞳には、驚きに目を見開く詩音が映っていた。信自身も驚いて、思わず腰を浮かせて立ち上がる。

「詩音ちゃん……どうして……？」

「あ……私は……鷹乃さんのところへ行った帰りで……」

「あ、そ、そっか、あの本屋さん、浜咲だっけか」

いつもの信なら「こんな偶然、逢えるなんて、すっげーラッキー」と顔をほころばせるはずだった。そして、それに詩音も照れながら、けれど嬉しそうに微笑み返してくれるはずだった。

だが今は、お互い不自然なほどうつろたえて、気まずげに視線をそらしていた。

「信さんこそ、どうして……？ バイトはどうなさったのですか？」

「えっと、ちょっとその、気分が優れなくて、そんで」

「……それで、どうして、こんなところに？」

「それは……その……」

信の狼狽ぶりは、さらに激しくなる。その様子からあることと気づき、詩音ははっと息を飲んだ。

「……真冬さんと……逢っていたのですか……？」

「え……」

瞬間、信は動きを止めた。それだけで詩音には十分すぎるほどだった。

唇を噛みしめ、じっと信を見つめる詩音の瞳に、涙が浮かんでくる。

信は慌てて詩音の肩を抱こうとした。しかし、その腕はそっと、けれど頑なに振りほどかれてしまった。

「詩音ちゃん……」

「……」

「その……別に、違いに行ったわけじゃない。偶然、逢ったんだよ。ほんとだって」

詩音の顔を覗き込むようにして云いながら、信は激しく自己嫌悪していた。

何を言い訳しているんだ、俺は。言い訳をしなければいけないようなことなのか？

硬い表情でじっと見つめていた詩音は、やがて顔を上げて、まっすぐ信を見つめた。

双眸を涙で一杯にしたその表情は、ガラス細工のように脆く、砕けそうに見えた。

「もし……私が、もう真冬さんとは逢わないでほしいと云ったら……どうしますか……？」

「詩音ちゃん……」

絶句する信。詩音もそれ以上言葉にできず、ただひたすら信を見つめた。

踏切の音が鳴り、電車が入ってくる。

人波が過ぎ、再び踏切の音が鳴って、電車が去る。

それでも二人は取り残された彫像のように、そこに立っていた。

互いが、互いの言葉を待つように。互いが、互いの口にすることを恐れるように。

ただ見つめ合ったまま、立ち尽くしていた。

第三話 「Disorder heart」

1

ファミリーレストラン「ルサク」。その従業員専用の裏口そばに、真冬は佇んでいた。

常にきつい印象を与える面差したが、今日はいつにも増して硬い表情をしているように見える。空の一点を見つめて、唇を噛んでいた。

しばらくして、裏口のドアが開いた。そちらに顔を向けて、伊波健が現れたのを確認すると、真冬はわずかに柔らかに微笑んだ。

「すみません、お待たせしました、真冬さん」

「うん。私こそごめんね、仕事中に」

「いえ……僕の方が、お呼び立てしたんですから」

そう、真冬は鷹乃經由で、健から相談を受けていたのだ。

そして、鷹乃を除けば、真冬と健の間で共通の話題になる人物は、ひとりしかいなかった。

「信、ずっと休んでるんですって？」

「はい、もう今週に入ってから、全然出てこなくて……」

「……」

「部屋に行って訊いても、『調子が悪い』って云うだけですし

……。何を考えているのか……」

「……部屋には、いるんだ？」

「はい」

「じゃあ……これまでよりは、ちょっとだけマシか」

苦笑とも安堵ともつかないため息を、真冬は漏らした。

また行方をくらまされでもしたらどうしようか、と真冬は考えていたのだった。もちろん健には意味がわかるはずも

なく、軽く首を傾げた。

「ごめん、なんでもないのでよ。詩音はなんて云ってるの？」

「……えっと……」

「私より先に、詩音に連絡してるんでしょう？」

その問いかけに、健は困惑して目をそらした。真冬はすつと瞳を細めて、健の横顔を見上げた。

「……何か、問題が？」

「僕も、詳しいことは聞いていません。もちろん、鷹乃は

双海さんにも連絡したんですけど……『そうですか』って……」

「……」

「……それだけ？」

「……みたいです」

「……」

はつきりと眉をひそめて、真冬が嘆息した。苛立ちがその

面を険しくさせる。

健は自分に非があるわけでもないのに、思わず緊張して背

筋を伸ばしてしまっていた。

「どういっつもりなのかしら。……いいわ、とりあえず私が信

に話を聞いてくる」

「はい、お願いします」

「……まったく……」

腕組みし、不機嫌に舌打ちする真冬。

そのとき、裏口が開いて、小柄な少女が顔を覗かせた。し

かし、振り向いた真冬の視線の厳しさに怯み、思わず息を飲

み込んだ。

「……ごめんなさい、お話中だったんですね」

「……」

「希ちゃん、どうしたの？」



姿を見せたのは、ルサツクの制服に身を包んだ相摩希だった。健の笑顔に少しほっとしつつも、希は緊張したままで言葉を続けた。

「あの、健さんにお願ひしたいことがあって、それで探してて」

「そっか、ごめん」

「あ、いえ、お話中なら結構ですから、ごめんなさい」

「……私の話はもう終わったから」

腕組みを解きながら、真冬は希のほうを見た。

相変わらず吸い込まれそうな瞳。そう考えて、希は真冬から目をそらせなくなる。

そんな希に、真冬はニツと唇の端だけで笑って見せた。

「お久しぶり。希ちゃん、よね？ 妹さんの具合はどう？」

「あ、はい、ありがとうございます！ おかげさまで、最近は大いぶ調子よくて……」

「そう。よかった。……じゃあ、私はこれで。伊波くん、仕事中にごめんね。ありがとう」

云いながら、真冬はもう踵を返していた。

挨拶をする暇もなく、健と希は並んで、真冬を見送っていた。だが、数歩歩いたところで、真冬は立ち止まって振り返った。ちらっと希に視線を走らせたあと、少し厳しい視線で健を見据える。

「念のため云っておくけど」

「は、はい」

「鷹乃を泣かせるようなことしたら、承知しないからね」

「そ……そんなこと、絶対しませんよ！」

思わず顔を真っ赤にして言い募る健をじっと見つめると、真冬は再び猫のように微笑んだ。

しかし、振り向いて歩き出したときには、すでにその表情は険しいものに戻っていた。

歩きながら、肩からかけていたバッグから携帯電話を取り出す。そして、折り畳みの本体を開いて、電話帳を操作しよ

うとしたところで、ふと困惑気味に真冬は眉をひそめた。

(そっか……私、詩音の電話番号は知らないんだわ……)

信に会う前に、詩音の話を聞いておくのが筋だと思ったのだけれど。

そう考えたとき、真冬の面には苦い笑みが浮かんでいた。

「筋……？ 筋って、なんだろ」

自嘲気味に呟く。

自分は今いったい、何をやっているのだろう、と真冬は思った。あの二人の間で、自分という存在はいったいなんなのか。

ため息と同時に軽く頭を振って、真冬は携帯電話を畳み、バッグにしまった。

自分で決めたことだ。たとえどんな想いをしようとも、自分の気持ちから目をそらさない。誤魔化したり、逃げたりしない。もう一度と。

だから。苦しんでいる彼を、放っておくことはできない

迷いのない光を黒瞳に宿して、真冬は朝凧荘への道のりを辿り始めた。

暗闇の中で、信は膝を抱えて座っていた。

いつ頃、陽が沈んだのかも、覚えていない。それどころか、昼夜の感覚も麻痺しつつある。

ただ一つわかっていることは。

今の自分の行動が、まったくの無意味であるということ。いや、行動とさえ云えまい。ただこうして、ここに座り込んでいるだけなのだから。

そうわかっているとしても、信は動くことができなかった。

これまでずっと、考えるより先に行動してきた。自分の気持ちを信じて、動こうとしていた。

けれど、それは答えを出すことを、先送りしていただけなのかも知れない。場当たりな行動を繰り返すことで、その場をしのいできただけなのではないか。

そう思うと、信は動けなくなつた。

自分だけの、本当の「答え」を見つげ出すまでは。

その「答え」は、こんなところで座り込んでいたって、絶対に見つかるはずがないとわかっているながら。

無限に繰り返される、無意味な自問自答の中で、信はただうずくまっていた。

ノックの音が響く。

信は反応しない。

もう一度、今度は少し強くドアがノックされ、同時に、静かな問いかけがあった。

「信………？ いないの？」

「………」

その声に、信はのろのろと顔を上げた。声は出さず、濁った目をドアに向けている。

やがて、ドアノブがかちゃりと回された。鍵は、していないかった。

「……… 入るわよ？」

薄闇の中へ、その闇より黒い髪と瞳の女性が入ってくる。そして、闇の中から自分を見据える視線に気づき、小さく息を飲んだ。

「信？ どうしたの？」

「………」

「電気……… つけるわよ」

真冬は手探りでスイッチを入れ、部屋の電灯をつけた。まぶしさに、信が思わず目を閉じる。その憔悴した様子に、真冬は眉をひそめた。

「いったい、どうしたっていうの？ この間のことで、そんなに………？」

目を閉じたまま信はうつむき、答えない。

真冬は部屋に上がり、コートを脱いで、信の隣に膝をついた。そして、両手で信の肩を掴み、うつむいたその顔を覗き込もうとした。

「ねえ、信………」

「………」

「詩音と……… 何かあったの………？」

「………」

「詩音。」

その名を聞いた瞬間、信は弾かれたように顔を上げた。血走った瞳で、真冬を睨む。

真冬はわずかに怯みながらも、まっすぐにその目を見つめ返した。

「やっぱり、そうなのね？」

「………」

「……… 話して。力になれることが、きっとあるから………」

「………」

真摯な、いたわりに満ちた黒瞳を、しかし信は、未だ仇を見るように睨み据えていた。

話す？ 何を？ 真冬とはもう逢わないでほしいと云わ

れたことを？

力になる？ どうやって？ 二度と姿を見せるなどでも頼むのか？

それは、かつて真冬自身が選ぶようになったこと。そのとき、俺は、俺と詩音はなんと云った？ 何を望んだ？ その結果、どうなった？

俺が望んだことは、俺の願いは……。

俺は 俺は 俺は !!

「……きゃっ……」

瞬間、真冬は何が起こったのかわからなかった。視界が回転し、気がつけば天井が見えている。

そして、覆い被さってくる、最愛のひとの、苦渋に歪んだ顔。

「やだ、ちよっと、悪ふざけはやめなさいよ」

「……」

やはり信は答ええないまま、真冬の胸元に手を伸ばし、ブラウスを引き裂いた。

真冬は蒼白になり、信の腕を掴む。

「いや、やめて、信……！」

そのまま信を突き飛ばそうとした 一人暮らしの長い真冬は、護身術を身につけている そのとき。

「……真冬……」

「信……？」

「……真冬……俺は……」

かすれた呟きに、真冬は信の瞳をじっと覗き込んだ。その目を、真冬は知っていた。ずっとずっと昔。あの、激しい雨の日に。

「……」

「……」

本当に、このひとは変わっていないんだ。あのときのままに、優しく、脆い。

そう思ったとき、真冬は腕の力を抜いて、信の手を離した。

「……わかった……」

呟きながら、面をそらす。

見つめられたままでは、きっと信もやりづらいたろうと思ったから。

そして、やはりとても 悲しいことだったから。

「いいよ、好きにして。私のすべては……信のものだから……」

「……」

信が息を飲む。

真冬は目を閉じて、ただ待っていた。

……わずかな沈黙のあと。

信は体を離して、再び壁際に座り込んだ。

真冬はその姿勢のまましばらく横たわっていたが、やがて、深いため息と共に呟いた。

「どうしたの？」

「……帰れよ」

短い答えに、真冬は目を開く。そして、体を起こしながら、

きつい眼差しで信を見据えた。

「……なによ、それ。意気地なし」

「いいから、帰れて云ってるだろ！」

「云われなくたって。ここまでへたしだとは思わなかったわ。こ

ちから願ひ下げよ」

「……」

乱暴に立ち上がり、真冬はコートを羽織った。破れた胸元を隠すため、コートの前をきっちりと合わせる。

そのまま出ていこうとして、真冬はドアを開けたところで

振り向いた。信は彼女がここへ来たときと同じように、膝を抱えたままうつむいている。

「……ねえ、信」

「……」

「……あんたの雨は……いつあがるの……？」

……やはり答えはなく。

ドアは静かに閉ざされた。

呼び鈴の音を、詩音はぼんやりと聞いた。

以前に比べればずっと社交的になったとはいえ、やはり未だ彼女には、突然訪ねてくるような友人は多くない。

誰だろう、わずらわしい……そう思いながら、詩音は席を立った。

ふと覗いた窓の外は、夜の帳が落ちていている。静かな雨が降り始めていたようだった。

もう一度、玄関の呼び鈴が鳴る。

ため息をつきながら、詩音は玄関に向かった。

本当に、誰だろう。これまでならいちばん可能性の高かった人物は、しかし、今は来るはずがない。もしかしたら、もう二度と。

自分の想像に胸を痛めながら、詩音は玄関のドアを開いた。そして、更なる衝撃に息も忘れ、その黒い瞳を見つめていた。

「こんばんは」

そう云って、真冬はニツと唇の端だけで笑う。猫のよう、と彼女が呼ばれる由縁。

「突然ごめんね。雨降ってきたから、傘貸してもらおうと思っ

て」  
確かに真冬の髪も肩も、雨に濡れていた。詩音は何も答えられず、茫然と立ち尽くすばかりだったが、

「上がったもいかな？」  
と尋ねられ、機械仕掛けのように不自然な仕草で頷いた。

「は……はい、どうぞ」

「ありがと。おじゃまします」

微笑んで自らの横を通り過ぎる真冬を、詩音は怯えた眼差しで見送っていた。

居間に入っても、真冬は濡れたコートを手を脱ごうとしなかった。

「真冬さん？ コートを、お預かりします」

「あ……うん……」

珍しく、真冬が逡巡を見せる。そのとき、詩音はようやく、真冬がコートの前を襟元まできっちり閉めていることに気づいた。そう何度も会ったことがあるわけではなかったが、これまでの印象では、真冬はそういう着こなし方をしていたように思う。

だが、濡れたコートを着たままで、ソファに座るわけにもいかない。真冬はやむを得ずコートのボタンを外していき、詩音はブラウスの引き裂かれたその姿に、はっと息を飲んだ。

「……！ 真冬さん、いったい……」

「ああ、ちょっと引っかけちゃってね。ごめんなさい、見苦しくて」

何事も無いように、真冬は微笑んでみせる。

あまりに明白な嘘だったが、詩音は問い質すことができなかった。確かめることが、怖かった。

蒼白になって自分を見つめる詩音に、真冬は挑発的な笑みを向けた。

「悪いけど、珈琲もらえるかな。体冷えちゃったから」

「あ……はい、でも、珈琲だとインスタントしか……」

「いいわ。インスタントでも、今のあなたが入れる紅茶より、よほどおいしいでしょうから」

「……」

初めて会ったときのような、冷たい視線、斬りつけるような言葉。

それに何を云い返すこともできず、詩音は小さく頷いてキッチンに向かった。

震える手でお湯を沸かし、珈琲の準備をする。

そうしながらも、詩音の動揺はますます深まっていった。真冬の意図がわからなくて。

彼女がこの時期にやってきたのが、偶然であるはずがない。何かを、あるいはすべてを知った上で、ここに来ている。

彼女はいったい何を伝えようとしているのか。そう考えたとき、詩音はかつて真冬に叩きつけられた言葉を思い出した。

（あなたは、彼のなんなの？）

もう一度、あの問いを向けられたなら。自分は、あのときと同じように答えられるだろうか。今の自分に、その資格があるだろうか。

蒼白を通り越し、土気色と云っていいような顔色で、詩音は珈琲カップを一つだけ持って居間に戻った。珈琲であれ紅茶であれ、自分のために作るような余裕はなかった。

「お待たせ……しました」

「ありがと」

目の前に置かれたカップを、真冬はすぐには手に取らない。それは彼女が猫舌だからであり、そのことは詩音も承知していたが、それでも詩音はその行為が「拒絶」を示しているようで、息苦しさを強めた。

そんな詩音の想いを知っているのかどうか、ややあって、真冬はカップに手を伸ばして一口飲んだ。瞬間、眉をひそめたものの、何も云わずまたカップを机に戻した。

「……」

沈黙が降りる。

真冬は詩音を見ていない。窓の外に視線を向け、だんだんと勢いを増してきた雨を眺めていた。

一方、詩音は真冬の横顔から目をそらせなかった。蒼白な面持ちで、緊張に拳を握りしめて、けれど食い入るように、真冬を見つめていた。

「……それで」

不意に、外を向いたまま真冬が口を開いた。そして、びくと体を震わせた詩音に、ゆっくりとその黒い瞳を向けた。

「あなたは、何をしているの」

「……」

「信は今、苦しんでいるわ。それなのに、あなたはいったいこんなところで、何をしているの」

「それは……！」

一方的に責められて、初めて、詩音の胸に怒りに近い感情がわき上がった。

私たちが、どうして、こんなに苦しんでいるのか。それはいったい、誰のせいだと思っ

「……！」

浅ましい考えだと、自分自身で封じてきた想いが、ついに抑えられず噴き出そうとしていた。

「だったら……あなたが彼を救ってあげればいいじゃないですか……！」

「……」

「……彼だって……きつと……それを……望……ん、で……」

自ら口にした言葉で、自らを傷つけて、詩音は言葉を失った。

真冬は詩音の激昂にまったく動じることなく、冷やかに見つめ返している。

その闇のような瞳の静けさに、詩音の激情はたちまち冷め、ただ深い自己嫌悪だけが残った。

「……ごめんなさい……」

「……」

「私……私……知りませんでした……。自分がこんなに醜くて……弱い人間だなんて……」

「……」

「私には……もう、資格がありません……。あのひとを、大切だなんて、そんなことを云う資格は……。だから……」

「……そうね」

抑揚のない声で、真冬は云った。



雨の中にいた。

見上げると、暗く閉ざされた空から、銀の糸が絶え間なく降り注いでいるように見える。

いつかこんなやり切れない思いで、雨空を見上げたことがある。そう、あれは。

真冬に、別れを告げたときだ。

そう思い返して、信は血がにじむほど唇を噛みしめた。

あれから、自分は何をしてきたのだろうと思う。

人を傷つけて、傷つけて、傷つけて。

それでも、願いつけたことはなんだっただろうか。

つぐないか？ 許されることか？ それとも。

答えを見出せず、それがまた誰かを傷つけていく。

深い絶望は、もはや叫び出す力も信には与えない。  
しかし。

いつの間にか、雨が遮られていた。

見上げると、そこには白い傘。

振り返ると、そこにいるのは、銀がかった薄茶色の髪に、不思議な金の瞳をした少女。

「……詩音ちゃん……」

答えず、詩音はただ信に傘を差し掛けていた。

初めて出逢った頃のように、硬い、能面のごとき無表情で。

第四話「Rain then clear」

1

雨は依然激しさを増しているようだ。

窓に打ち付ける銀の雫を眺めながら、信はそんなことを考えた。

詩音の家にいた。

あのあと、促されるまま歩き、ここへやってきた。そして、居間のソファに腰掛けて、詩音が戻るのを待っていた。詩音は今、キッチンにいる。

不思議と、落ち着いた気持ちだった。

これまでずっと、自分が答えを出さなければ、と思い込んでいた。なんて傲慢だったんだろう、と信は思う。

答えを出そうとしているのは、自分だけではない。

そのことに、信は気づいた。あの雨の中、傘を差し掛けた詩音の静かな瞳を見たとき。

そして、すでに彼女がその答えを見出したのなら。それがどんなものであれ、自分には受け入れるしかない。

不自然なほど静かな、けれど、どこかやるせない想いで、信はただ窓の外を見ていた。

こうして見ると、この銀の雨は、まるで彼女の髪の毛の流れのようだ。それとも……涙、だろうか……。

「お待たせしました」

静かな声に振り向くと、詩音がティーカップを一つ持って、歩いてくる場所だった。

詩音は信の前にティーカップを置き、向かいのソファに腰掛けた。

かぐわしい香りが辺りを包む。

けれど、信は紅茶に手をつけず、じっと詩音を見つめていた。

彼女の答えを、先に聞きたかった。

しかし、詩音は何も云わず、無表情なまま面を伏せていた。

「詩音ちゃん……その……」

沈黙に耐えられず、信が口火を切ろうとする。

そのとき、詩音が顔を上げて信の目を見た。そして、思わず怯む信に、小さな声で呟いた。

「冷めないうちに、召し上がってください」

「あ、ああ」

「それが、私の気持ちです」

「……え……？」

戸惑って、信は詩音と、温かい湯気が浮かぶティーカップとを交互に見た。

しかし、詩音はそれ以上何も云おうとはしない。ただまっすぐに信を見つめていた。

沈黙の時間のあと。信はわずかに震える手を伸ばし、ティーカップを持ち上げた。口元に運び、一口飲む。

「……あ……」

信は驚いて、大きく目を見開いた。

詩音の紅茶は最高だと、常々思っていたけれど、今飲んだものは、これまでとは全く違っていた。味も、香りも。ただおいしいというだけではない、暗闇にしか目を向けられないでいる自分を、優しく包み込んでくれるような。

「すっげー、おいしい……」

そんな言葉でしか表現できないことを、自分自身情けなく思いながらも、信は茫然と顔を上げてそう答えた。



すると、そのとき。ずっと無表情だった詩音が、小さく微笑んだ。

自分を包み込む紅茶の芳香と、その悲しいほど優しい笑顔が、信にあの夕暮れの教室を思い出させた。

はじめて、詩音が信に紅茶を振る舞ってくれた、あの日。自分自身の痛みを隠して、誰かの力になるうとしていたその笑顔を、信は守りたいと思ったのだった。

彼女には、心からの笑顔でいてほしい。できることなら、俺のそばで。それだけが、俺の願いだっただけで。

「……真冬さんが、以前、私に云ったことを、覚えていますか？」

「え？」

静かな笑顔のまま、詩音が口にしたその名前に、信ははっと我に返った。

詩音は信の返事を待たずに、言葉を続けた。

「あなたは、信のなんなの？ 真冬さんは、そうおっしゃいました。私は……わかりません、と答えました」

「……」

「今でも、それは変わりません。私には、わからない」

「詩音ちゃん、それは……！」

「……」

思わず腰を浮かした信に対して、詩音はやはり穏やかな笑顔に向けた。信は言葉がなくし、飲まれたようにその金の瞳を見つめるばかりだった。

「……」

「……」

「……」

頬をわずかに染めて、詩音は目をそらした。

信はほとんど放心して、べたんとソファに座り込んだ。

少し気持ちが落ち着くと、泣き出したような気分になった。

本当に、真冬が云ったとおり。

俺は、本物の、バカだ。

「紅茶、冷めますよ」

「……うん」

頷いて、信は手を伸ばし、紅茶をもう一口飲んだ。ひび割れた心にしみ通っていくような、不可思議で、温かい、その味。

気づいたときには、信も笑顔を浮かべていた。何がそんなに嬉しいのか不思議なぐらいの、詩音が大好きな、その笑顔。

「ほんっとうまいよなあ、これ。なんていう紅茶？」

「そんな特別なものではありません。ダーズリンですよ」

「へえ……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「ダージリンってのは、インドだっけ」  
 「そうですけど……」

信がどういつつもりでそんなことを訊いたのかわからず、詩音は小首を傾げた。

信は少しの間、神妙な顔つきで考え込んでいたが、突然、すごい勢いで立ち上がった。

「し、信さん？」  
 「決めた！ 俺、インドに行つて来る！」

「……は、はい？」  
 理解不能。それが率直な詩音の感想だった。どうして、急にそんな話になつてしまうのか？

「インドに行つて、俺が詩音ちゃんのために、最高の茶葉を手に入れてみせるよ！」

「……いえ、だから、そういうものではなくて……」  
 「それにさ、いつか一緒にに行けるかも知れないじゃん。そんなきのための下見も兼ねてさ。大丈夫、まかしときなつて！」

「……」  
 詩音は文字通り目を丸くして、信をまじまじと見つめていた。しかし、やがてこらえきれず吹き出し、大声で笑い始めた。

「……本当に……もう……あなたつていう人は……」  
 珍しいくらい笑い転げる詩音の瞳から、涙がこぼれる。  
 信もまた顔を笑顔にして、その涙をぬぐった。

「……で、本当に、本気で、インドに行くわけね」

「おう、俺はいつだって本気だぜ」

「……」  
 その答えに、真冬は深い深いため息をついた。

再び、信の部屋にやってきていた。

健から、信が元気になったのはいいが、またとんでもないことを云いだしている……と聞かされたのだ。前回のことがあったので、少し迷ったけれど、やはり真冬は信が出した答えを知りたかった。

自分を迎えたときの信の笑顔で、彼の気持ちはわかったつもりだったけれど、まさかこんなことになっているなんて。

「ほんつつつつつとうに……バカなのね」

「……しみじみ云うなよ」  
 情けなさそうに眉を寄せたあと、また屈託なく信は笑った。

「ずるい男だ、と目をそらしつつ真冬は考える。この笑顔を向けられると、何も云えなくなつてしまふ。」

「名案だと思つたんだけどなあ。詩音ちゃんも笑ってくれたし」

「……そりゃあ、笑うしかないでしょうよ」

「ひでえ……」

「まあ、あんたらしいと云えば、あんたらしいわね」

そう云つて、真冬はニツと唇の端だけで笑つて見せた。

「いちばん大事なことは、相変わらず気づいてないバカっぷりだけだ」

「なんだよ、いちばん大事なことつて」

「……教えてあげないわ」

「あんたがそばで笑っていることが、詩音の何より望んでいることだ、なんてね。」

しきりに首を傾げている信の姿に苦笑しながら、真冬は意地でも教えてやるもんか、と思った。

「それで、私へのオトシマエは、どうやってつけてくれるのかしら」

「……あ……」

信が息を飲んで、青ざめる。

真冬は挑発的に微笑み、わざとしなを作るような仕草で信の方に体を傾けた。

「途中でやめられると、女は傷つくわ」

「ま、真冬……」

後ずさるうとする信の胸ぐらをつかみ、真冬は顔を寄せた。

互いの息がふれあうほどの距離で、真冬の黒瞳がじっと信の目をのぞき込んでいた。

怪しく光る、猫のような瞳。

黒髪から香る、心を乱れさせるほど甘い。

「真冬……ダメだ……」

「……」

再び、ニツと真冬は笑った。誘うような、嘲るような、泣き出すような、蠱惑の笑み。

「冗談よ」

手を離して、真冬は立ち上がった。信は思わず、深い息を漏らしてしまう。

「じゃあ、そろそろ帰るわ」

「……ん。駅まで送るよ」

真冬の言葉に、信も立ち上がった。そして、先に出ようと、玄関に向かって足を踏み出したとき。

背中から、そっと抱きしめられた。

「……真冬……」

「何も云わないで。なんか云ったら、ぶん殴るわよ。こっちを向くのも禁止」

「……」

「お願いよ……。少しだけ……、このままで……」

真冬の手は小さく震えていた。嗚咽を必死でこらえようと振り返って、抱きしめることができたなら。

どれだけ、気持ちになることだろう。

けれど、それは信も真冬も、望むことではなかった。

だから、真冬は声を殺して涙を流し、信は血がにじむほど唇を噛んで、立ちつくすばかりだった。

結局、真冬は一人で朝風荘を出た。これ以上、二人でいると、もっとみっともない姿を見せてしまいそうで、嫌だった。そして、それは正解だったかな、と真冬が考えたのは、門を抜けたところで、詩音に出会ってしまったからだ。

「……あ……」

「……あら」

詩音は戸惑い気味に視線をさまよわせる。真冬は冷たい瞳でそんな詩音を見ていた。

「信なら、部屋にいるわよ」

「は、はい、その……」

「なあに」

「ごめんなさい、あの……」

詩音は真冬に謝りたかった。けれど、そんなことで真冬が喜ぶはずがない。

本当に伝えるべきことはなんなのか、うまく言葉にできないもどかしさに、詩音は身をすくめて狼狽していた。

真冬は依然、昔のように硬い表情のままだったが、やがて、ぼつりと呟いた。

「お願いがあるの」

「……なんでしょう」

「一度だけ、ひっぱたいてもいい？」

詩音ははっと顔を上げて、真冬の瞳を見た。

怒りも憎しみも、そこからは読み取れない。

それでも詩音は目を閉じて、頷いた。

「はい、どうぞ」

「……」

真冬が手を振り上げる気配がする。詩音は奥歯をかみしめ、衝撃に備えた。

一瞬の間のあと。

ふわりと柔らかい感触が、詩音の頬を包んだ。

「……！ 真冬……さん……？」

驚いて目を開くと、真冬は詩音の頬を撫でて、微笑んでいた。

黒瞳にはいつぱいの涙が浮かび。

口元には、とてもとても優しい笑みをたたえて。

「信を大事にしてあげてね。約束よ」

「……はい……はい……っ」

真冬の手を握り、大粒の涙を次々にこぼしながら、詩音は何度も頷いた。

そして、その誓いを、深く心に刻んだ。

epilogue

空の蒼さは、目が痛いほどだった。

その蒼天を裂くように、一条の飛行機雲が伸びている。

真冬は目を細めてそれを見ながら、呟いた。

「……ほんとに行っちゃったわね……」

「……そうですね……」

静かに微笑んで、詩音が頷く。

真冬は肩をすくめて、ため息をついた。

「ほんっとくに、バカなのね」

「……そう、かも知れませんがね」

目を見交わして、二人は笑った。

冬の空は高く、空気は冷たく澄んで。

晴れた空は、どこまでも蒼い。

「雨は、あがったのかな」

「……え、なんですか？」

「なんでもないわ。そろそろ帰るわね」

「……あ、よかったら、家に寄ってくださいませんか？ ケー

キも焼いたんですよ」

「おいしい珈琲が入られるようになったら、考えてあげる」

「真冬さんこそ、紅茶の魅力にいい加減気づいてください」

「ごめんだわ」

もう一度笑って、真冬は空を見上げた。詩音もその視線を

たどるように、同じ空を見上げる。

飛行機雲は、もう、消えていた。

Memories Off EX  
Scenario for  
Shin, Shion & Mafuyu  
"The Rain"  
end

あとがき ー 思い出にかわる君 ー

過去最大の難産でした……。

やっぱり、信は難しいです(汗)。自分なりに納得して、オリキヤラ化しようとも、この世界観なりの「稲穂信」像を考えたつもりだったんですが……なかなか……。

結局、今回も実は何も解決してないです(笑)。

当初は、信に憧れの人(恋愛対象じゃなくて)を設定して、それをきっかけに夢を見つけるようなことを考えていたんですよね。「想君」のテンション辺り、ちょうどいいかなあと考えたんですが、やっぱりどんなキャラかわからないのに、名前だけ借りて勝手に作るの抵抗がありましたし。信の「夢」を語るには、それこそゲーム一本分ぐらいのシナリオがないと説得力はないだろうって思って、やめました。

それでいろいろ考えた末、「願うのは、ただ彼女の笑顔だけ」ってのも、信らしいんじゃないかと思って、この話の骨子ができあがりました。

これは、私自身が仕事に生き甲斐を求めないタチだからかも知れませんが(笑)。仕事なんて、食っていければOKなので。それより、大切な人が、そばで笑ってくれることの方が、ずっと大切です。そう思いませんか？(笑)

各話のタイトルは、皆さんお気づきだと思えますが、メモオフ2ndのBGMから取ってきています。最終話に「Rain then clear」が使いたかったんで(笑)、ほかのも含めいそいなを探して引っ張ってきました。

さて、このお話は(実現しているかどうかはともかくとして)「信の自立」がテーマだったわけですが、裏のテーマは、「真冬が信とのかつことを思い出に変わっていかうとするきっかけ」を

描くことだったりしました。なので、単にネタに使っただけでなく(笑)、文字通り副題は「思い出にかわる君」だったので。

このことは賛否両論ありそうな気もしますが(つか、「否」が圧倒的に多いような気がして怖いんですが)、いいじゃないですか、真冬もそろそろ新しい恋をしたって。ねえ。

信は結局、真冬に何もしてあげられませんでした。男が別れた女のために何かできるなんて思うのは、男の勝手な自己陶醉に過ぎないですよ。女にとっては、そんなのありがた迷惑っ！もんで。私はそう思うんですけど、間違ってますでしょうか(笑)。

ということ、シリーズの本流としては、これで真冬とメモオフ世界との繋がりは一段落です。次はようやく「冬物語」最終章になるわけですが……まだまだ時間がかかりそうです……。お見捨てなく、気長にお待ちくださると嬉しいですよ。

最後に。難しいのはわかりきっていたので、書くのを敬遠していた本作ですが、それを書く気になったのは、やはり「読みたい」と云ってくださる方がいればこそです。つまづきそうになったモチベーションを支えてくれた、ぼむさんと穂波さんに、この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございます。やっぱり物書きを支えるのは、読者の声です。今後ともよろしくお願いたします。

長くなりましたが、これから真冬をひとつよろしく

(笑)。  
ご感想など、いただければ幸いです。

二〇〇二年十月十九日  
八神大輔

初出

- |                        |             |
|------------------------|-------------|
| 第一話 「Busting time」     | 二〇〇二年八月二十日  |
| 第二話 「Love & paradox」   | 二〇〇二年八月二十六日 |
| 第三話 「Disordered heart」 | 二〇〇二年九月十日   |
| 第四話 「Rain then clear」  | 二〇〇二年十月十九日  |